29

広田伝亮の「見聞録」と 1820年代初期の春林軒における医療

松木　明知

弘前大学大学院 医学研究科 麻酔科学教室

合水堂の門人佐藤持敬は華岡青洲（以下「青洲」）の著述が「同名異書」,「異名同書」となっている混乱を収束するために，1861年に「華岡氏遺書目録」を編集した．当初，佐藤はこの目録に59種の著述を収載したが，呉　秀三は1923年に13種を補った．これが現在我々が見る「華岡氏遺書目録」である．収載書を大別すると，青洲の口述記録，処方集，門人の見聞録，疾病論，図譜類，その他となる．いずれも青洲の医術や思想を研究する上で欠かすことが出来ない史料であるが，とくに青洲の医術を研究する上で口述記録は重要であろう．そして，これに劣らず重要なのが門人の見聞録である．口述記録は青洲の視点から見た春林軒の医術を示すが，門人による見聞録は彼らが実際に経験した春林軒での医療を伝えている点で，口述記録に勝るとも劣らない価値を有すると演者は考えている．しかし，このような記録は極めて少ない．ここで紹介する広田伝亮（以下「伝亮」）の「見聞録」は呉が部分的に引用したことで知られていたが，呉の用いた写本の所在は不明で，その書誌も含めた詳細は不詳であり，伝亮の略歴も明らかでなかった．

演者の調査では，現存する伝亮の「見聞録」は東京医大図書館と大阪市史編纂所に所蔵されている2本のみである．本発表ではより正確な前者を対象に述べる．表紙に「春林軒見聞録」とあるが内題は「見聞録」である．全60丁．書写年を含めた識語はない．伝亮本人の筆跡が不明なので，この写本が伝亮の稿本か否かは分からない．本書は1822年から1824年にかけて春林軒で経験した症例を主として漢文（一部仮名混じり和文）でまとめたものである．症例数は170余例に上るが，これらは彼が直接診療した症例であり，春林軒の患者の全体ではない．「乳巖（岩）姓名録」によれば，1822～24年には計21例の乳癌手術が行われているが，その割には「見聞録」には乳癌患者の記述が3例と少ない．乳癌患者は主として青洲が診察治療していたからであろう．3例中1例では腋下に腫瘍があったので，手術は行われなかった．したがって，この患者は「乳巖（岩）姓名録」には記入されていない．

本書によって判明した新知見の一つは，幹部の門人が患者の需に応じて近隣の村に往診に出かけたことである．伝亮の他に，久米純台，松岡，脇，今城，雲平（青洲の長男），岩城，片山，稲川であった．もちろん青洲も往診した．乳癌の患者は広く西日本各地から春林軒に集まったことが「乳巖（岩）姓名録」によって知られるが，その他の難病の患者も西日本各地から春林軒を訪れた．判明しているだけでも，隣国の大和を始めとして，浪華，河内，泉州，摂州，播州，京都，江州，丹後，勢州，尾州，讃州，阿州，丹州，予州であり，最も遠隔の地は加州であった．1822年にはわが国二始めてコレラが伝播したことが知られるが，「見聞録」は和歌山でもコレラが流行したことを伝えている．青洲がコレラに対する対症療法として甘草写心湯，人参湯などを投与して効果を挙げたことはこれまでに知られていなかった．また「見聞録」は翌1823年の和歌山における麻疹の流行についても言及しており，これに対して十全大補湯を投与すれば死亡することはないと記述されている．

伝亮は1824年の末までに郷里の筑前・筑紫郡金隈に帰郷したと思われ，同所で地域住民の医療に尽瘁し，併せて多くの子弟の教育にも意を注いだ．しかし，過労のためか，1843年9月に享年47歳で病没し，地元の「法行寺（ほうぎょうじ）」に葬られた．門人たちはその遺徳を偲んで碑を建立した．しかし，2005年の福岡県西方沖地震で法行寺は甚大な損害を受けて，糟屋郡志免町に移転を余儀なくされ、寺名も「一心寺」と改められた．その際，絶家となっていた広田家の墓碑，伝亮の顕彰碑も廃棄処分された．その経緯についても報告する．